

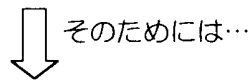
ミクロネシアレポート 環境について

1、ゴミ問題

□ 原因

ポンペイのゴミはとてもゴミになっている。

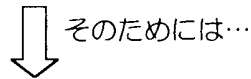
昔は食べたものでも、なんでも山や海に捨てていた。ポンペイにはあらゆる所にバナナやパンの実（bread fruit）などたくさんの食べ物がなっている。だからポンペイの人々はお腹が空いたときにそれを採って食べていたから外にそのまま捨てても食物連鎖で自然にかえっていた。今は昔と違い化学製品や外国からの輸入品が多くなり、自然にはかえらなくなった。でも人々は今も昔のように捨てている。だから、食物連鎖ができなくて今のゴミ問題がある。



ちゃんとゴミ箱に捨てる！なるべく島のモノを食べる！

□ ゴミ処理場

ポンペイにもゴミ処理場がある。でも、そこはあつめてきたゴミをただ重ねるだけ。もともと、島の人々がゴミを捨てる時は分別をしていない。だから、ゴミ処理場に持って行ってもそのまま、またそれが積み重なりまったく処置されない状況になっている。



しっかり分別して捨てる！

□ 感想

ポンペイのゴミ問題はひどいというのは聞いていたけど予想以上だった。島の人々がどんどん自然にゴミを捨ててしまうのは本当によくないと思う。今のミクロネシアもすごくキレイだけど、昔はもっとキレイだったのだろう。せっかくあんなすばらしい自然があるものにもったいないと思う。島に人々のキレイな心を自然にも生かしてほしい。今何か政策をしても、結果が出るのは何年や年中五になってしまうけど、今からでも遅くないと思う。だから、みんなが協力して、改善してほしい。

2、マングローブ

□ マングローブとは

熱帯および一部の亜熱帯の入江や河口などの浅い泥地に生じる常緑樹の総称。

ヒルギ科・クマツツラ科・シクンシ科・センダン科・ハマザクロ科・ヤブコウジ科・イソマツ科などの植物からなる。

マングローブは木根や支根を著しく伸ばし、網の目のように張り巡らせるため、海からは防潮堤の役割をして高潮の被害を防ぎ、陸からは海への土砂の流出を防いで、海中のサンゴの生育を助けている。また、水中にも網の目状に張り巡らされた根が稚魚や幼魚の格好の隠れ家となって魚や多くの生物を育む。そのため、「海のゆりかご」と呼ばれている。

□ ポンペイのマングローブ

ポンペイには8種類が確認されている。周囲を世界でも有数の規模のマングローブ林に囲まれており、非常に貴重な生態環境を保有しているといわれている。キチ地区のエニペインという場所にはかつてディブウィンメン族と呼ばれる人々が住んでおり、彼らはマングローブが一本倒れることはディブウィンメン族がひとり死ぬことを意味し、マングローブ一本増えることはディブウィンメン族が一人増えることを意味すると思っていたという。

ケプロイの滝に行く途中に見たマングローブ



ミクロネシア・ポンペイ・戦争の足跡

8月14日から21日までグアムを経由してミクロネシア連邦ポンペイ州へ私は行ってきた。世界地図では一つの点でしかなかったその小さな島は私が見たこともない、経験したことのない世界を持っていた。

飛行機から見たその島は、とても美しく青い海からは目が離せなかった…

1521年ミクロネシアが名も無き島からマゼランが来航したことにより世界の歴史に加わった。その後はポルトガル人・スペイン人等によってキリスト教が伝えられた。

19世紀に入ると、スペインが領有権を宣言しミクロネシアの統治時代がはじまってしまった。

●統治時代の一連の流れ●

1512年 マゼラン来航「ミクロネシアの歴史が生まれる（これ以前から人々の生活はあったが文字としてはなにも残っていない。）」

↓

1526年 ポルトガル人来航

↓

1529年 スペイン人来航「カトリックの布教活動が行われた。」

↓

1886年 スペインが領有権を宣言

↓

【米西戦争勃発、スペインは米に負け財政破綻に陥りドイツへ売却】

1898年 ドイツによる統治「積極的な経済開発が行われた。」

↓

【第一次世界大戦勃発、ドイツは負けて国連へ】

1920年 国連より日本の委任統治領として認められる。

↓

【太平洋戦争勃発、日本は負けて国連へ】

1947年 国連より米国を施政権者とする国連信託統治地区。

↓

1986年 米国との自由連合に移行し国連に加盟。

このようにミクロネシアはさまざまな国に統治されたという歴史を持っている。

現在では、ミクロネシア連邦となって4つの州（ヤップ・チューク・ポンペイ・コスラエ）をもち、首都をポンペイに置いている。

●日本統治時代●

私がボンペイへ行って人々と触れ合う中で感じたことは、日本統治時代というものがあったにもかかわらず、島の人々からは反日感情というものをまったく感じなかったことだ。大使館や現地の JICA の方々から聞いたお話では、統治時代に日本は島にお米・道路・農業・教育を教えてくれたらしく、「ヤレ!!」と命令したのではなく、一緒に働き、今まで島には働くという考えが無かったのに働くという文明をもたらしたといえます。ほかの国の統治時代では、自分たちだけ良い暮らしをしていたと聞きました。

しかし、日本が作った畑などは米国の統治時代に壊されてしまったそうです。なので、ボンペイには畑がありませんでした。

でも今もなお、たくさんの日本が持ち込んだ文化がボンペイにはありました。

●日本が残したもの●

日本はお米を持ち込みました。私のホームステイ先では毎日ご飯が出ました。

こちらではパンよりもご飯のほうが主食になっているようです。

たくあんもご飯と同じくメジャーになっているようです。しかし、たくあんは日本では、おにぎりの横に添えてあるのをいいますがボンペイでは、芝付けのような、香の物全部をたくあんといっていました。

ぞうり、これも日本人が教えたものでした。町を歩く人のほとんどがビーチサンダルで（このビーチサンダルをぞうりと呼んでいた。）家へ帰ると裸足だったりしていました。私の考えでは、日本人がぞうりを統治時代に持ってきていなかったら、きっとごく最近輸入が始まるまでみんな裸足だったのでは!?なんて思いました。

日本語を教育していたりしたので結構日本の言葉が島には残っていました。

例えば、かえる・運動会・・・

運動会という言葉が日本が教えたものならば、それまでは運動会が無かったと思います。

また、町にも日本の色は残っていて、銀行や政庁のある通りの名前は「ナミキ・ストリート」並木通りと今でも呼ばれていました。

カピングマランギ村の入り口で流暢な日本語を話す89歳のおじいさんに会いました。

この方は日本統治時代に日本人から日本語を学んでいたそうです。

おじいさんは、とてもやさしい感じでニコニコと笑いながら私たちの質問や写真に応じてくれました。

このおじいさんに会って日本は本当にこの島に良い文明を持ってきたんだな、と思いました。

●日本軍の忘れ物●

私たちは、日本軍がボンペイへ運び込んだ大砲などの戦跡を見るためにソケース・マウンテンに登りました。途中までは車で行きました。そこからは頂上まで約40分、途中20分ほどで広い比較的平らなところに出ました。

日本軍はそこを拠点に大砲などを設置しました。私が見たのは3台で錆ついてはいたけれど大砲!!という威厳は今もなおありました。

この山は日本軍が道を作り整備しました。その道のおかげで今回私たちが登れました。大砲はどうやって山に設置されたかという部品をバラバラにして、何人もの人の手によって長いものでは20日あまりかけて運び込みました。穴を掘って弾薬庫を作ったり、石で要塞が作られていました。

これらの大砲や要塞は今も日本によって持ち帰られることもなく、静かにジャングルの中で眠っています。

この平らな所からさらに20分ほど登ると頂上です。この頂上には戦争時代にここで亡くなった戦士へと「無名戦士の墓」が日本の方向を向いて建てられていました。

●考察●

今回ボンペイへ行って一番強く思ったことはボンペイには反日感情がない。ということです、ボンペイに行くまで私は日本が統治していた国だけあって日本が残した傷は多いんじゃないかと思いました。しかし、ボンペイへ行っていろいろな人から話を聞きましたが、地雷があるとか、南京大虐殺のようなことがあったなどそういった話は聞きませんでした。町で会う人はみな全然知らない人でもニコリして挨拶をしてくれました。

ボンペイには日系人が多く、私のファミリーも日系の家系でした。今では日本人が経営しているお店があったり、JICAの隊員の方が現地の人と一緒に働いていたり、産業を生み出すために技術を教えたりと、密接な関係を築いています。

今回はボンペイを見て考えたりしましたが、チューク（トラック）は日本軍の主要基地が置かれていたために米軍の集中攻撃を受けてしまいました、なので、ここの人々はボンペイの人とは違う感情を持っているのかもしれないと思いました。本当ならばそんなことが無いといいけれど、地元住民にも大きな被害が及んだこの島ではどうなのか?と思いました。機会があればぜひこの人に統治時代に何があったのかを聞いてみたいです。

日本が第二次世界大戦で原爆を落とされて大きな傷を負いました、そのように自分の国に戦争中どんなことがあったのかなんていうことは少しではあるかもしれないけれども知っています。しかしほかの国に日本がどんなことをしたのかということはいささかよく知りませんでした。なので今回実際に行って肌で感じることで戦争はいけないということを再認識しました。